わたくしの実践のあゆみ

――「資料」を大切にしながら――

坪井千代子

一、はじめに

野地潤家先生との出会いは、母校大下学園祇園高等学校で学んだという因縁によるものである。

新学制が実施された昭和二五年頃、広島市内のほとんどの学校は原爆の惨禍に苦しみ続けていた。幸い、大下学園は、郊外にあって建物の焼失を免れ、文部省の研究指定校として、広大から強力なスタッフを迎え、新生の意気に燃えて、日夜、真摯な教育にとりくんでおられた。その研究陣の一員として、野地先生は週何回か講義にお見えになっておられ、その因縁で、佐本房之先生が、昭和二七年に赴任された。

広大入学後、佐本先生にご紹介いただいて初めて基町のお宅におうかがいした。(詳しくは、文集「松籟」第1号で述べた。)玄関横のお部屋に坐って、(そこは、本の谷間ともいうべきもので、三人でぎりぎりという広さに狭まっていたが、)身を小さくしてお話を承った日のことを今でもはっきりと覚えている。

そのころ、一冊の分厚いご著書を頂いた。「国語教育個体史研究」――国語教育個体史主体篇一　その3―(昭和29年9月20日発行白鳥社)である。このご著書の「意義と価値」が、当時の私にはわからなかったが、日を経るに従って、ますます重いものになり、今、手にしてみると、野地潤家先生の御教えのすべての原点ではないかとさえ、感じられる。このご本で、「一つの大きな命題を掲げ、そのためにどのような資料を集め、準備し、どのように実践したかを克明に記録する」という生き方を貫きとおす――という基本姿勢を、まのあたりに「こんなにするんだよ。」とお示し下さっているように思われる。

野地潤家先生から学んだことは筆舌に尽し難いが、私なりに、「資料」にまつわる思い出話などを以下章を分けて述べていきたい。

二、卒業論文

私は、卒業論文に「ことば絵本の研究」というテーマを選んだ。四五九ページの冊子の「あとがき」には、次のように書いている。

――卒論のテーマが「絵本の研究」ときまったのは、昭和30年9月3日であった。野地先生からのご助言により、その日その足で積善館に探しにいってみつけたのが、「ことば絵本」と呼んでいる「あいうえお」(資料①)であった。本来は「ことばあそび」(講談社一年生文庫)を探すのが目的であったが、たまたま売り切れていたために、代わりに購入したのであった。ところがいつのまにか当初

の「ことばあそび」から離れ、「あいうえお」の分析に移行していったのであった。（中略）

どんな調査・研究でも同じことが言えるのであろうが、一冊の「あいうえお絵本」が奥深い言語教育のまっただ中に立ち、背後に広々とした果てしない言語文化をになっていた。調査を進めるうちに、わたくしは、「ことば絵本」の姿が、ますます、もうろうとわからなくなっていくような感じさえもつにいたった。（後略）――

昭和32年1月8日稿――

参考文献として、A本論に直接引用した文献9冊、B部分的に参照した文献26冊、を列挙している。そのうち、Bの2の、

「絵本の研究」牛島義夫著（昭18刊協同公社出版部）は、特に思い出が深い。この本のおもて表紙の見返しには、

田中さん（注1）

昭和31年9月17日　　野地潤家

と、ご署名がそえられていることでもわかるとおり、卒業論文のテーマが最終決定した（昭和31年9月3日）直後にいただいている。私自身のサインで「昭和三十一年九月十九日野地潤家先生よりいただく。㊞岡山天満屋古書部」と書き記している。

「ことば絵本」という命名は、だれがしたのか、その後も不勉強で、今もって知らないし、現在この用語が、市民権をもっているのかも知らないが、当時の私は、いわゆる「あいうえお絵本」とよばれている絵本を集め始めた昭和30年9月3日から31年6月までの16か月間に、23冊の同類の絵本を収集し、その分析でゆきづまっていたころかと思われる。この本の分析の方針が、大きい打開のかぎとなって、卒論を推進させることができたのであった。

卒業論文の「あとがき」で、

――今、やっと、このはるかな道の第一歩を歩みかけたにすぎない……。

と書いている。未知の部分がいかに大きいかを知りえただけに終わっている。その後、現場についたこともあって、このテーマはストップしたままになってしまった。しかし、この時、ご指導いただいた、

一、実証の精神

まず資料を集め、その中から問題点を発見していく。

二、研究の継続

自己流を防ぎ、先達の研究をふまえて前進する。

という二つの基本方針は、知らず知らずのうちにその後の現場実践に反映しているように思う。

注1　田中千代子（旧姓）

三、大下学園国語科教育研究会

この会は、昭和二七年四月に佐本房之先生が赴任してこられて五年目の昭和三一年から現在までずっと続いている研究大会である。私は、卒業生というご縁のおかげで、第一回から毎回欠かさず出席し、時には、研究発表もさせていただいてきた。これまでの研究発表のテーマは以下のようになる。（表一）

会数 大回	昭和	テーマおよび副題	後次 卒年
第3回	33	「聞くことの指導」——小学校三年生のばあいを中心に——	1
第11回	41	「最後の授業」の心情の読みとりについて	10
第13回	43	「二年生の文章表現の一考察」	12
第16回	46	「感想文の一考察」——「ごんぎつね」の場合——	15
第17回	47	「読むことの指導」——「アフリカのたいこ」の場合——	16
第19回	49	(実践報告)「話すことの指導——「発表会」の場合」	18
第20回	50	「個人文集」の実践報告	19

(表 一)

数少ない発表ではあるが、これらのテーマを通じて言えることは、現場での悩みが多岐にわたるが如く、領域も、切りこみ方も、まちまちで、首尾一貫していないことである。しかし、その時々に悩んだギリギリの問題点だけは提示しえているように思う。困った時にはそこでふみ止どまって自分なりに解決していこうとした態度は、ほかならぬ卒業論文で培われた基本姿勢であった。就職一年目に、教室の騒音調査をするために、西署へ機器をお借りしにいったが、当時の三篠小学校の木造校舎は、昨五四年に鉄筋に建てかわったとのことである。そばを走っていた国道は、新国道に主導権をゆずりわたし、生徒数五四人という学級児童数も、今にして今昔の感ひとしおである。

四、二七会その他

問題の所在を足下の現実に求めるにしても、それは自己流におちいることなく、絶えず、理論化の方向をめざして研究の質を高めること、このことを先生はいつも厳しく言っておられる。

しかし、「理論」への道は、果てしなく遠い。そのために、数々の学びの場を設定してこられた。私が出席している範囲内で、それらの研究会を挙げてみる。

月例会

- 二七会（昭和33年～現在）
- 芦田恵之助先生研究会（昭和48年～現在）

年次大会

- 大下学園国語科教育研究会（昭31年～現在）
- 広島大学教育学部国語科光葉会（昭39年～現在）

この他に、広島市小学校国語科教育研究会が主催する、夏季合宿研究会（昭和三六年～現在）も毎年欠かさずご出席下さり指導を賜わっいる。

私自身について言えば、多くの会に顔出しするばかりで、何一つまとまらずはずかしく思っている。しかし、他の方々の研究発表を聞くことが、私の唯一の勉強方法なので、今後とも、これらの会への出席を続けたいと考えている。

この他に、私が出席している会は「ともしび会」（藤井秀昭主宰）「少年詩の会」（榎野譲主宰）「広島文学教育研究会」（広大教授森本正一先生指導）などがある。すべてにわたって、野地先生の根本精神が脈々と流れ、広島の国語人の精神的風土になっている。私はそれらに、育てられ、教えられてきた。

五、昭和五四年度の実践

昭和五四年度の実践の中から、「資料集め」という観点での指導事例を述べてみたい。昨年度は、四年生を担当した。四年生という学年で、はじめて辞書の指導を始めるので、この辞書指導を導入とする、児童による「資料集め」を意図してこの単元を計画した。

指導書によれば、本学年の指導の要点は、次のように書かれている。

三、指導の要点（第四学年指導の要点）

［読むこと］

（前略）

「語句の習得」については、「読むために必要な語句の量を増すこと」がある。「国語辞典のひきかた」では、この学習にきわめて端的に行うことができるが、すべての教材、言語教育の中で、常に行われる必要がある。

「語句の探求・調査」では、「語句の意味を文脈にそって考えること」「わからない文字や語句について辞典を利用して調べる方法を理解すること」がある。語句の意味を文脈にそって考えることは、読解指導の上できわめてたいせつなことで、生きたことばとしての文章を理解する基本的なものである。また、辞典を利用して、さらに積極的に自主的に言語活動にとり組むということは、本学年から行われる学習であり、前学年の「わからない文字や語句をみつけ出すこと」と比較すれば、その特徴的な意味が理解できよう。教科書の「国語辞典のひきかた」の学習は、そのための効果的な教材ではあるが、ここでつちかわれた知識・習慣が、今後の学習に生かされなくてはならないことは、言をまたないであろう。（後略）

（「小学校国語教師用指導書」一〇ページ）

辞書の指導が一通りなされたあと、それが習慣化し、生活の一部になるまでに定着させるには、その単元がすんだあとの助言なり意欲づけが大切になってくる。六月で、「国語辞典のひきかた」を一応学習し、馴れたところでこの九月単元「からだとことば」に取り組んだ。

単元目標は、次のようである。

☆国語に対する関心や知識を高めるとともに、研究心を育てる。

1　意味のまとまりを考え、中心点をわかりやすく発表できるようにする。

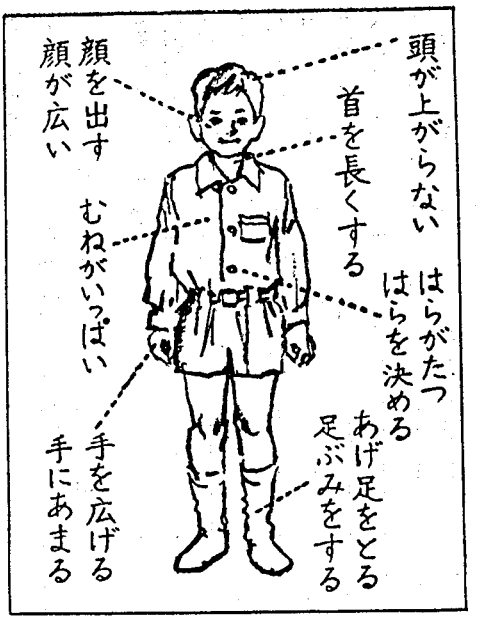
2　相手の研究発表を正しく聞きとる能力や態度を伸ばす。

3　語彙を拡充し、慣用句を正しく理解し使用することができるようにする。

従ってこの単元の主要目標は、話し聞く力の向上をねらっているわけであるが、私は、3の「語彙の拡充」の方を帯単元ふうにその後も継続的に扱っていった。この点について同書一七一ページの「教材提出の意向」では、次のように述べてある。

――また、体に関係のある多くのことばを示し、その意味がいろいろと広がることを考えさせ、ことばの多様性に気づいて、児童がすすんで、今後の発展活用を図るようにも意図されている。

六月以来、辞書の指導をしてみて困ったことは、「辞書に出ていなかった。」と簡単にあきらめる児童が多いということである。その理由としては、



（表　二）

①言い切る形でひく（教科書四上　P七三）

という基本がまだ身についていない。

②ものの動き、ようす・せいしつを表すことばなどで、送りがなのあるものは、ことばの形がいろいろに変わ（るので）言い切りの形を考えて、その形でひく。（同書四上　P七三）

ということが十分に理解できていない。

③「慣用語句」の場合、そのままでは出ていない。ある程度、中心語句を手がかりに推測しなければならない。

「からだとことば」の場合、辞書に出ていないという発言が多かったのは、「足ぶみをする」・「顔を出す」・「頭が上がらない」・「はらを決める」・「むねがいっぱい」の慣用句である。（表二）

これらの語句の場合、辞書のひき方として、次のような便法をとらせた。

①中心語句だけに線を引き、その意味や例文を写す。

・足ぶみをする（②物ごとが、進まないで、ぐずぐずしていること。☆仕事が足踏みしている）

・むねがいっぱい（②こころ。思い。心の中。☆うれしさで胸がいっぱいです。）

②中心語句だけに線を引き、近い意味を写す。

・はらを決める（③度胸（どきょう））

・顔を出す（④顔ぶれ。人数）

③他の辞書で探させる。

頭が上がらない。（したがうほかはない。☆かれには、一度助けてもらったことがあるので、頭が上がらない。）（文英堂

学習国語辞典）

児童が使用している辞書（常時、教室に置いているもの。家庭用には別に持たせた）は次表のごとくになる。（表三）

学習国語辞典　時枝誠記編　文英堂	2人
学習国語新辞典　金田一京助編　小学館	1人
例解学習国語辞典　金田一京助編　小学館	8人
小学国語辞典　石黒修編　三省堂	17人
学習新国語辞典　平井昌夫　青葉出版	2人
例解国語辞典　時枝誠記　中教出版	3人
用例学習国語辞典　金田一春彦監修　学習研究社	2人
小学国語辞典　吉田精一編　旺文社	1人
小学学習国語辞典　築島　裕　旺文社	1人
学習新国語辞典　川端康成　佐伯梅友　講談社	1人

（表　三）

辞書のひき方の指導を徹底させた後、「からだの部分に関係したことば（主として慣用句）」を集め、その意味調べもして、カードに書くという学習を課した。教室の背面黒板に掲示コーナーを作り、各自、フラッシュカードに書いては張らせるようにしたところ、非常に興味をもって積極的に辞書をひくようになった。収集の結果は次表のようであった。（表四）

からだの部分と慣用句

鼻	7例	顔	7例	口	3例
頭	4例	舌	2例	耳	6〃
目	5〃	歯	3〃	あご	2〃
額	1〃	髪	1例	まゆ	1〃
足	6〃	手	3〃	胸	3例
骨	2〃	身	1〃	首	1〃
腕	1例	指	1〃	爪	2〃
背	1〃	腹	2例	へそ	2〃
腰	1〃	肩	1〃	合計	69例

（表　四）

慣用句が出つくしたころ、次の取り組みとしては、「方言と共通語」（十一月教材）を扱い、「広島方言」集めをさせた。その後、「まちがい字探し」をさせた。その調査結果を研究記録文にまとめた児童作品の一つは次のようである。

自由研究「まちがい字さがし」

四の三　三谷　弘子

わたしは、「まちがい字さがし」について調べたことを発表します。

最初に、この「まちがい字さがし」を始めようと思ったわけについてお話しします。この間、国語で、「からだとことば」という勉強をして、からだの部分に関係の深いことばを集めました。見つけてきた人は、紙にマジックで書いて教室の後ろにはります。その時は、山下君が一番多かったので、わたしは負けたなと思いました。

続いて今度は四の三で、「まちがい字さがし」をすることになったので、わたしはがんばろうと思ったのです。

次に、研究の方法ですが、それはこの表を見てください。

研究の方法

一、ことば集め

◉かんばん・包み紙・ポスター・本・表さつ・新聞などで、じ

っさいに使われている例を集めた。

◉そのつど、ノートに記録した。包み紙等は、そのまま切りぬいた。

二、まちがいかどうかたしかめる。

◉家の人にきいてみた。（わからない時は先生に。）

◉辞書で調べた。

研究のまとめ

ことばを分類した。

表を作った。

自分の考えをまとめた。

こうして集めたことばを、みなさんにしょうかいします。たくさん書いてあるのですが、表に書ききれないので、まちがいの種類べつに、一つか二つずつを選びました。（　）の中が正しい字です。

ア　昔の字

まんぢう（まんじゅう）學校（学校）

イ　略字

ジェット　机（ジェット機）商事（商事）

ウ　活字のちがい

半分（半分）　朝日新聞（朝日新聞）

エ　当て字

フレッ酒（フレッシュ）

オ　うそ字（字がぬける）

止って（止まって）

カ　くせ字やつづけ字

馬（馬）　広島（広島）

キ　くり返し字

たゝみ（たたみ）うまい〳〵（うまいうまい）

わたしたちがうそ字と思っているものも、昔使われている字だったり、略字だったりして、ほんとうにまちがっている字というのは少ないのだなと思いました。このようなおもしろいことばさがしをこれからも続けたいと思います。

（文集みなみかんおん第15号　4・5・6年用　二九～三〇ページ）

これらの課題にとりくむ中で、最初は教科書から出発した単元であったが、児童たちは、方言を見つけるために手帳をポケットに入れておく工夫をしたり、ろうかや街の看板の字に目ざとくなって、自然に語彙を豊かにする努力を重ねるように育ってきたと思う。一一月二日の行者山の徒歩遠足では、道々、表札を一軒一軒のぞいて歩いて、

「あ、字がちがっている。」

「昔の字かねえ。」

と語りあったりした。私もさそわれて楽しいことばの学習をすることになった。

六、都志見往来日記をたどる

中国新聞の夕刊第一面に、昭和五四年一〇月一八日から一二月二一日にかけて表題のシリーズが掲載された。写真と活字の多い新聞

紙面にあって、掌にのるほどの記事の大きさといい、水墨画と写真の対比の試みもおもしろく、更に湯の山・湯来と言えば、毎年夏休みに合宿研究会で足を運んでいるなじみの道なので、とても興味深く読んだ。

この記事は三部だてになっている。

広島――湯来篇　54・10・18～10・30　(9)
湯来――加計篇　54・11・12～11・22　(10)
加計――広島篇　54・12・10～12・21　(11)

新聞の記事から「都志見往来日記」をたどるシリーズの由来を引用すると、

「都志見（つしみ）往来日記」は、広島藩抱えの画家岡岷山（みんざん）が寛政9年（一七九七年）山県郡豊平町都志見の駒ケ滝を探勝、その道中を記したもの――岷山から二百年、そのコースはばく然と地図上に現存する。しかし、彼が見聞したものが、どの程度風化しているか、日記と絵を頼りに出来るだけ忠実に、都志見往来を復習し、過去が今、いかに生きているか（後略）」

を見ようとしたもののようである。この記事で、ハッと目をひかれたのは、二一日付の最終回の箇所である。

――岷山の都志見往来コースはばく然と地図上にある。とは最初に思ったことだが、「ある」と断定しないでよかった。歩き終わって、改めて、地図に実線を入れてみると、予定した線と完全に一致するのは太田川だけ、岷山の通った道は地図から消えた所さえもある。もし日記がなかったら、あるいは絵だけだったら、おそらく、地図上で求められる道しかたどれなかったはずである。

絵と対比する写真では泣かされた。下から見た印象と、上からのぞいた視野を、頭の中で組み合わせて描いた絵の前には、レンズは無力である。写真が真実だと力んでも、絵の方がほんとうに見えるから不思議である。（後略）

筆者が述べているように、もし、日記がなかったら、このような作業は不可能だったはずである。記録を残すことの意味を物語っている事例である。

七、花づくり夫妻の奮闘記

花咲爺さん現代版として週刊朝日（55・3・14付）二六～二七ページに紹介された近藤秋二さん（七二歳）は、梅の全品種五百種を我が家の庭にそろえようとしていらっしゃるそうである。

その苦心を伝える記事の中で、

――戸籍台帳の番号で照合できる数十冊の梅アルバム、梅研究家リスト、全国梅名所一覧から、開花期前後の気象メモ、梅に関する新聞切りぬき、梅の動向全般を記した梅日記など、梅に費やす情熱は、おさまらない。

ご自慢のものに「いろは順古今梅品種名一覧」がある。江戸時代以後、文献に表れた約千の品種名（ほぼ半分は現存しない）をリストアップしたものだが、この完璧を期するため、三万五千円の古書の復刻版を買った。参考にしたのはわずか一ページ。――

という文字が目に入った。一つの道にかける執念といおうか、求めてやまない、ひたすらな姿をそこに見ることができるように思う。

八、一行の誤報

今年（昭和五五年）の二月一七日付けの朝日新聞に、「老新聞記者の良心」という見出しで、大佐古一郎氏の、これまた記者魂の模範ともいうべき生き方が紹介されていた。手みじかに説明すると、

大佐古氏は43年中国新聞社をやめたが、年来、日記を書き続けてこられ、昭和20年の一年間は50年2月から7月にかけて中国新聞に連載された。原爆体験が風化していく中で、この連載は反響を呼び、連載後、「広島昭和二十年」として中公新書の一冊となった。この中に一行の誤報があった。九月十九日の項の末尾に「（枕崎台風）でジュノー博士も宮島で土砂流のため死亡した。」と。氏は、誤報と分かった時、血が逆流するようなショックを受けた。その日から、猛烈な再取材が始まった。

足で200人以上に取材し、ジュネーブまでもとんだ。その誤報訂正が一冊の本となった。「ドクター・ジュノー武器なき勇者」（新潮社）である。——

ことばにたずさわる職業であれば、当然のこととも言えるが、この一行をもおろそかにしない厳しさは、我々国語教師にこそ求められているものである。

九、資料の方から歩いてくる

前出四で述べた芦田恵之助先生研究会でのことである。「綴り方十二ケ月」復刻のいきさつをお話し下さった中で、

——「まぼろしの書物」であるこのご本を、長い間、さがし求めていたところ、資料の方から歩き出したかのようにふとしたきっかけで見つかり、私ども（古田拡先生・野地潤家先生）の手で、復刻版を出す運びになりました。——

というお言葉があった。何という劇的な出会いであろうか。そうした出会いのことについて先生は、次のようにもお書きになっていらっしゃる。

——今から三〇数年前、太平洋戦争中、学生時代のわたくしは、袋町小学校講堂（焼けない前の）で、佐藤春夫・久米正雄・横光利一をはじめ、多くの作家の文芸講演を聴いた。それは読むこと同様、たいへんたのしい体験であった。そのこと一つでも、わたくしの袋町小学校への感謝の念となつかしさとは尽きない。

すぐれた書物への出会いもまたつねに感謝の念を伴うといってよい。（昭和50年10月14日稿）——

（あゆみ——袋町小学校P・T・A新聞　第114号「読書への道」より転記）

基町時代以来の山のような資料類から、数々の名著が生まれているわけであるが、その資料との出会いのエピソードをお聞きすると、先生は、苦しい中にも、日本の国語教育を切り開いていかれる醍醐味を味わっていらっしゃるのではないかと推察申し上げている。

（広島市立南観音小学校教諭）